富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第16集

能越自動車道関連
埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告

ＮＥＪ－13
ＮＥＪ－14
ＮＥＪ－20
ＮＥＪ－21
中尾坊田遺跡
中尾新保谷内遺跡

2002年３月

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

能越自動車道（一般国道470号）は、富山県西部と石川県能登半島地域の高速交通体系の確立や沿線地域の活性化を目指し、北陸自動車道小矢部砺波ＪＣＴから高岡市、氷見市を通り石川県輪島市に至る路線として計画されました。

当調査事務所ではこの能越自動車道建設計画に伴い平成４年度から発掘調査・遺物整理の事業を実施しております。発掘調査事業は、今年度までに五社遺跡（小矢部市）・開酵大滝遺跡（小矢部市）・石名田木舟遺跡（小矢部市・福岡町）・地崎遺跡（小矢部市）・簑島遺跡（福岡町）・江尻遺跡（福岡町）・下老子笹川遺跡（福岡町・高岡市）・近世北陸道遺跡（高岡市）・手洗野赤浦遺跡（高岡市）・岩坪岡田島遺跡（高岡市）・堂前遺跡（高岡市）の発掘を終了しました。

本書は、能越自動車道高岡北ＩＣ～氷見ＩＣ間に所在するＮＥＪ－13（高岡市五十里）・ＮＥＪ－14（高岡市西海老坂）・ＮＥＪ－20（氷見市中尾）・ＮＥＪ－21（氷見市中尾・鞍川・大野・大野新）の埋蔵文化財包蔵地及び中尾坊田遺跡（氷見市中尾）・中尾新保谷内遺跡（氷見市中尾）における遺跡の範囲や遺存状態を把握するために実施した試掘調査の結果をまとめたものです。その結果、高岡市では五十里沼田遺跡（古墳時代）・堂前遺跡（縄文時代）、氷見市では中尾茅戸遺跡（古墳～中世）・中尾新保谷内遺跡（古墳～中世）・神明北遺跡（中世）・大野江淵遺跡（中世）の一部を新たに確認しました。調査の成果が今後の遺跡の調査保存等に一助になれば幸いです。

最後に、今回の調査にあたり格別のご協力とご配慮をいただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

平成14年３月

財団法人　富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所　長　桃野真晃

例　言

1　本書は平成13年度に高岡市五十里・西海老坂地内、及び氷見市中尾・鞍川・大野・大野新地内の能越自動車道建設予定地で実施した埋蔵文化財包蔵地の試掘確認調査報告書である。

2　調査は富山県教育委員会の決定に基づき、財団法人富山県文化振興財団が国土交通省富山工事事務所からの委託を受けて実施した。

3　調査は財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所が実施し、調査員は次のとおりである。

ＮＥＪ－13（平成13年５月16日～５月17日）

調査員　調査第二課長　酒井重洋、同文化財保護主事　越前慎子・町田賢一・田中昌樹

ＮＥＪ－14（平成13年７月30日～７月31日）

調査員　調査第二課長　酒井重洋、同文化財保護主事　深堀茜・町田賢一

ＮＥＪ－20（平成13年10月25日～10月29日）

調査員　調査第二課長　酒井重洋、同文化財保護主事　町田賢一

ＮＥＪ－21・中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡（平成13年10月９日～10月25日）

調査員　調査第二課長　酒井重洋、同文化財保護主事　越前慎子・町田賢一・田中昌樹

また、ＮＥＪ－20・ＮＥＪ－21・中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡の調査において次の二名の調査指導及び協力を仰いだ。

富山県埋蔵文化財センター　調　査　課　文化財保護主事　越前慶祐

氷見市教育委員会　生涯学習課　学　芸　員　廣瀬直樹

4　調査参加者は次の通りである。

現地測量等　長田耕一・坂田菊雄・高桑健二・蛯子博美・中島英夫・炭谷直樹（㈱佐藤工業）
塚本忠則・嘉信豊（㈱田中建設）、藤井隆司・山中毅（㈱松本建設）

調査補助員　荒山奈美恵・澤千鶴・増山幸子

現場整理作業員　角田麗子

調査作業員　植野良一・喜多清直・畔木和雄・菅原一雄・長礼知・橋本定夫（高岡シルバー）
安土健三・穴倉務・伊藤むつ子・境信男・沢田てる子・曽場栄一・中川一美・
広瀬久枝・藤林としい・水口貞子・水本いみ子・南ちよの・谷内健一（氷見シルバー）

自然科学分析　松田隆二・染谷深雪（古環境研究所）

5　発掘調査・資料整理・本書の作成には、下記の方々から様々な援助をいただいた。記して甚大なる謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

安念幹倫・大野究・岡本淳一郎・島田修一・山口辰一・山本正敏

6　本書の編集・執筆は全般を町田が担当し、自然科学分析執筆を松田（古環境研究所）が行った。

7　図版のトレースは、調査第二課文化財保護主事　中野由紀子、室内整理作業員　名苗静子・中沖恵子が行った。

8　遺物写真の撮影は、調査第一課主任　島田美佐子の協力を仰いだ。

9　出土遺物及び記録資料は、当埋蔵文化財調査事務所が一括して保管している。

10　表中の出土遺物の略号は次の通りである。

縄土＝縄文土器　土師＝土師器　須恵＝須恵器　中土＝中世土師器　土質＝土師質土器

越瀬＝越中瀬戸　伊万＝伊万里　陶器＝産地不明陶器　Ｐ＝プラント・オパール試料

目　次

序
例言
目次
Ⅰ　位置と環境……1～2
　1　位置と地形……1～2
　2　周辺の遺跡……1～2
Ⅱ　調査の経緯……3
Ⅲ　調査の概要……4～19
　1　ＮＥＪ－13……4～6
　2　ＮＥＪ－14……7～8
　1　ＮＥＪ－20……9～11
　2　ＮＥＪ－21……12～16
　3　中尾坊田・中尾新保谷内遺跡……17～19
Ⅳ　自然科学分析……20～30
　Ⅰ．プラント・オパール分析……20～25
　Ⅱ．貝類の同定……26～28
　Ⅲ．放射性炭素年代測定……29～30
Ⅴ　小括……31～32
　引用・参考文献……33

図・表目次

第１図　調査地の位置……1
第２図　調査対象地と周辺の遺跡……2
第１表　既住の調査一覧……3
第２表　ＮＥＪ－13トレンチ一覧……4
第３図　ＮＥＪ－13トレンチ位置図……5
第４図　ＮＥＪ－13出土遺物実測図……6
第３表　ＮＥＪ－14トレンチ一覧……7
第５図　ＮＥＪ－14トレンチ位置図……8
第４表　ＮＥＪ－20トレンチ一覧……9
第６図　ＮＥＪ－20トレンチ位置図……10
第７図　ＮＥＪ－20出土遺物実測図……11
第５表　ＮＥＪ－21トレンチ一覧……13
第８図　ＮＥＪ－21トレンチ位置図１……14
第９図　ＮＥＪ－21トレンチ位置図２……15
第10図　ＮＥＪ－21出土遺物実測図……16
第６表　中尾坊田・中尾新保谷内遺跡
　トレンチ一覧……17
第11図　中尾坊田・中尾新保谷内遺跡
　トレンチ位置図……18
第12図　中尾坊田・中尾新保谷内遺跡
　出土遺物実測図……19
第７表　ＮＥＪ－21プラント・オパール分析
　結果(1)……24
第８表　ＮＥＪ－21プラント・オパール分析
　結果(2)……25
第９表　中尾坊田・中尾新保谷内遺跡　貝類の生
　態と検出状況……28
第13図　試掘調査により新たに確認された遺跡の
　位置……32

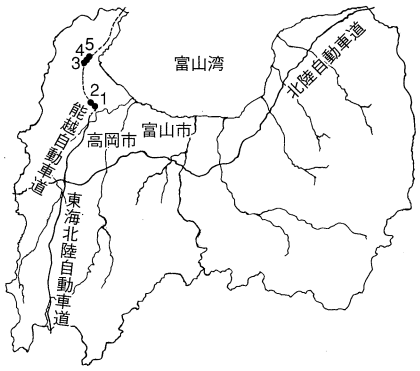
図版

図版１　ＮＥＪ－13・14航空写真
図版２　ＮＥＪ－13
図版３　ＮＥＪ－14
図版４　ＮＥＪ－20・21、中尾坊田・中尾新保谷
　内遺跡航空写真１
図版５　ＮＥＪ－20・21、中尾坊田・中尾新保谷
　内遺跡航空写真２
図版６　ＮＥＪ－20
図版７　ＮＥＪ－21
図版８　中尾坊田・中尾新保谷内遺跡
図版９　プラント・オパールの顕微鏡写真(1)
図版10　プラント・オパールの顕微鏡写真(2)
図版11　中尾坊田・中尾新保谷内遺跡出土
　貝類写真

Ⅰ　位置と環境

1　位置と地形

調査対象地は、富山県西部の小矢部川左岸に位置する。ＮＥＪ－13は、高岡市五十里地内に確認された埋蔵文化財包蔵地で、西山丘陵とその支陵に挟まれた谷間に位置する。ＮＥＪ－14は、高岡市西海老坂地内に確認された埋蔵文化財包蔵地で、ＮＥＪ－13の山地を隔てた北側の細い谷間に位置する。ＮＥＪ－20は、氷見市中尾地内に確認された埋蔵文化財包蔵地で、千久里山南方の丘陵の谷間に位置する。ＮＥＪ－21は、氷見市中尾・鞍川・大野・大野新地内に確認された埋蔵文化財包蔵地で、上庄谷平野の中央部に位置する。中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡は、ＮＥＪ－21の北側と南側の丘陵に挟まれた部分に位置する。



1　NEJ-13　（高岡市五十里地内）
2　NEJ-14　（高岡市西海老坂地内）
3　NEJ-20　（氷見市中尾地内）
4　中尾坊田遺跡　（氷見市中尾地内）
　　中尾新保谷内遺跡　（氷見市中尾地内）
5　NEJ-21　（氷見市中尾・鞍川・大野・大野新地内）

第１図　調査地の位置

2　周辺の遺跡

調査対象地の周辺は、丘陵地・山地が大半であり、縄文時代や中世の城跡や古墳を除いては遺跡の多くはその縁辺や平野部に存在する。遺跡の時代は、縄文時代～中世まで様々あるため、次に時代ごとに周辺の遺跡を見ていく。ただし、調査対象地は広域に散っているため、便宜上、ＮＥＪ－13・14の高岡市域とＮＥＪ－20・21・中尾坊田・中尾新保谷内遺跡の氷見市域とに二分して見ていく。

縄文時代　高岡市域では、谷部に五十里西遺跡（１）、西山丘陵に中期の頭川オスキノ遺跡（２）・頭川宮中遺跡（３）、小矢部川岸に後晩期の百橋宮田遺跡（４）などがある。氷見市域では、上庄谷平野に大野沢遺跡（５）、丘陵上に荒館Ｂ遺跡（６）などがある。

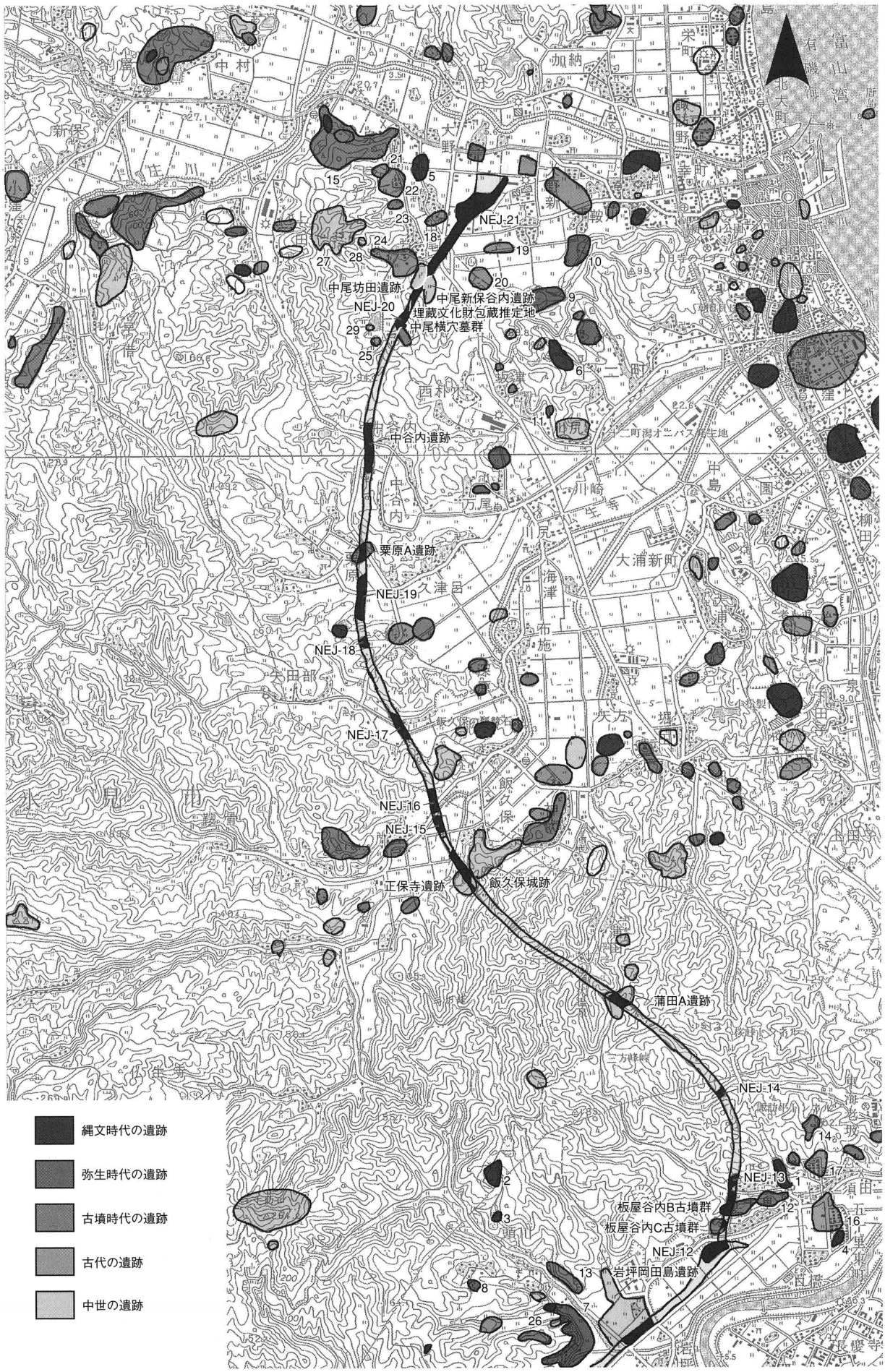
弥生時代　全体的に遺跡が少ない。高岡市域では、西山丘陵裾部に間尽遺跡（７）、丘陵中に後期の明田Ｉ遺跡（８）などがある。氷見市域では、丘陵裾部に後期の沖布Ａ遺跡（９）、上庄谷平野に鞍川横羽毛遺跡（10）、谷部に坂津Ｂ遺跡（11）などがある。

古墳時代　高岡市域では、ＮＥＪ－13の裏山に板屋谷内Ａ（12）・Ｂ・Ｃ古墳群、丘陵先端に頭川城ヶ平横穴墓群（13）、丘陵頂部に五十里古墳群（14）などがある。氷見市域では、ＮＥＪ－20の東に中尾横穴墓群、丘陵先端部に泉古墳群（15）などがある。

古代　高岡市域では、小矢部川左岸の国吉地域に奈良時代、東大寺領荘園須加庄があり、その関係が窺える須田藤の木遺跡（16）がある。この他に丘陵裾部に奈良・平安時代の五十里道重遺跡（17）などがある。氷見市域では、遺跡が多くあり、上庄谷平野内に大野南遺跡（18）、沖布Ｂ遺跡（19）、糠塚南遺跡（20）、泉Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡（21～23）などの集落、中尾坊田遺跡の西隣に寺跡の泉中尾廃寺跡（24）、ＮＥＪ－20の西に窯跡の中尾山田遺跡（25）がある。また、この付近には平安時代に源家賢の私領、阿努庄があった。

中世　高岡市域では、鎌倉時代の集落である岩坪岡田島遺跡、鎌倉・室町時代の山城である安居山城跡（26）などがある。氷見市域では、西の千久里山上に鎌倉･室町時代の千久里城跡（27）、山中に鎌倉･室町時代の祭祀遺跡である千久里岩屋堂遺跡（28）、ＮＥＪ－20西側の山裾に埋納銭が出土した中尾ガメ山遺跡（29）などがある。

近世　遺跡は見つかっていないが、両市域ともに加賀藩政を支える農地が広がっていた。



第２図　能越自動車道路線内の埋蔵文化財包蔵地と周辺の遺跡（１：50,000）

Ⅱ　調査の経緯

1　調査の契機と既住の調査（第１表）

能越自動車道（一般国道470号）は、富山県西部･能登地域の高速交通体系の確立及び地域活性化のため昭和62年の高規格幹線道路網計画の一環として、石川県輪島市から富山県砺波市に至る延長約100㎞の自動車専用道路として計画された。平成２年にこの工事計画を受け、国土交通省（以下、国土省）富山工事事務所･県教育委員会（以下、県教委）･小矢部市教育委員会で協議が行われ、小矢部市域の分布調査を行うことが決定された。また、平成４年度からは当財団が国土省から委託を受け発掘調査を実施している。これ以降、能越自動車道関連の調査は、分布調査を県教委、試掘調査を地元市教育委員会及び当財団、本調査を当財団が主体となり平成４年度から継続して実施している。

2　調査に至るまで

平成12年３月、県教委により能越自動車道高岡北ＩＣ～氷見ＩＣ間（氷見高岡道路）の分布調査が実施された。その結果、ＮＥＪ－13・14・15・16・17・18・19・20・21の９箇所の埋蔵文化財包蔵地と１箇所の埋蔵文化財包蔵推定地を新たに確認すると共に板屋谷内Ｂ古墳群、板屋谷内Ｃ古墳群、中尾横穴墓群、中尾坊田遺跡、中尾新保谷内遺跡、飯久保城跡、正保寺遺跡、中谷内遺跡、粟原Ａ遺跡の９箇所の周知の遺跡範囲を再度確認した。

平成13年５月10日、昨年度より要望のあったＮＥＪ－13の試掘調査について国土省と高岡市能越対策課との協議の上、５月14日より当財団が調査を行った。

平成13年７月18日、工事計画の関係上、早期着手の要望のあったＮＥＪ－14の試掘調査について国土省と高岡市能越対策課との協議の上、７月30日より当財団が調査を行った。

平成13年10月２日、県庁において県教委・県埋蔵文化財センター・氷見市教育委員会・国土省との協議が行われ、当財団が、ＮＥＪ－21・中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡の買収完了部分について試掘調査を行うことが決定した。これを受け当財団は、10月９日より調査を行った。

平成13年10月22日、当初より要望のあったＮＥＪ－20の試掘調査について、ＮＥＪ－21・中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡の試掘調査が早期終了予定となったため、国土省より引き続きＮＥＪ－20の試掘調査も実施するよう要請を受け、10月25日より当財団が調査を行った。

年度	調査対象地	調査種類	調査主体	調査面積（㎡）	調査期間	調査結果
平成10	下老子笹川遺跡	本発掘	財団	34,860(延56,869)	5／26～11／30	縄文晩期・古代の集落を調査
	近世北陸道遺跡	試掘		111(対象2,000)	6／1	近世北陸道を確認
	近世北陸道遺跡	本発掘		489	6／10～6／30	近世北陸道の側溝を確認
	ＮＥＪ－10	試掘		3,247(対象45,600)	11／24～12／8	手洗野赤浦遺跡を設定
	ＮＥＪ－11	試掘		4,181(対象46,800)	11／9～12／12	岩坪岡田島遺跡を設定
平成11	手洗野赤浦遺跡	本発掘	財団	2,900(延7,546)	5／21～10／19	中世後期の集落を調査
	岩坪岡田島遺跡	本発掘		430	10／18～11／29	中世前期の集落を調査
	ＮＥＪ－12	試掘		3,193(対象37,500)	10／18～12／1	遺跡なし
平成12	高岡北ＩＣ～氷見ＩＣ	分布	県教委	630,000	3／22～3／29	ＮＥＪ－15～21･埋蔵文化財包蔵推定地を設定、板屋谷内Ｂ･Ｃ古墳群･中尾横穴墓群･中尾坊田遺跡･中尾新保谷内遺跡･飯久保城跡･正保寺遺跡･中谷内遺跡･粟原Ａ遺跡を確認
	岩坪岡田島遺跡	本発掘	財団	8,002(延17,514)	5／22～12／19	古代・中世の集落を調査
平成13	岩坪岡田島遺跡	本発掘	財団	10,839(延12,435)	5／22～11／30	縄文時代前期の川、古代・中世の集落を調査
	堂前遺跡	本発掘		834(延1,668)	10／22～12／11	縄文時代中期～後期の谷、中世の集落を調査

第１表　既住の調査一覧

※平成10年度以前の調査については、「能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告―ＮＥＪ－10･ＮＥＪ－11―」を参照願いたい。

Ⅲ　調査の概要

1．ＮＥＪ－13埋蔵文化財包蔵地

(1)　調査対象地（図版１）

ＮＥＪ－13は、北側を西山丘陵（五十里引地）、南側をその支陵（五十里板屋谷内）に挟まれた細い谷間の中央に位置し、ほぼその中央に小さな川が東西に流れる。この川の北側はもともと丘陵の裾部となっていたが、近年の土砂採取によって平地となっている。南側は、田地・畑地で圃場整備がなされているものの、北方から南方に下る地形となっている。なお、標高は現況で約19～20mを測る。

(2)　調査の方法（第３図）

幅約1.6m・長さ約45mの試掘溝（以下トレンチ・Ｔとする）を１箇所、幅約0.9m・長さ約10～48mのトレンチを４箇所の計５箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遺構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は14,570㎡、調査面積は189㎡である。

(3)　基本層序

Ⅰａ層	現耕作土	暗褐色シルトなど（約20cm）
Ⅰｂ層	盛土	オリーブ褐色シルトなど（約30cm）
Ⅱ　層	古墳時代遺物包含層	黒褐色シルトなど（約25cm）
Ⅲａ層	古墳時代遺構検出面	にぶい黄褐色シルト質ロームなど
Ⅲｂ層	埋没谷堆積層	黄褐色粘土質ロームなど
Ⅳ　層	地山	浅黄色砂など

(4)　調査の状況（第２表）

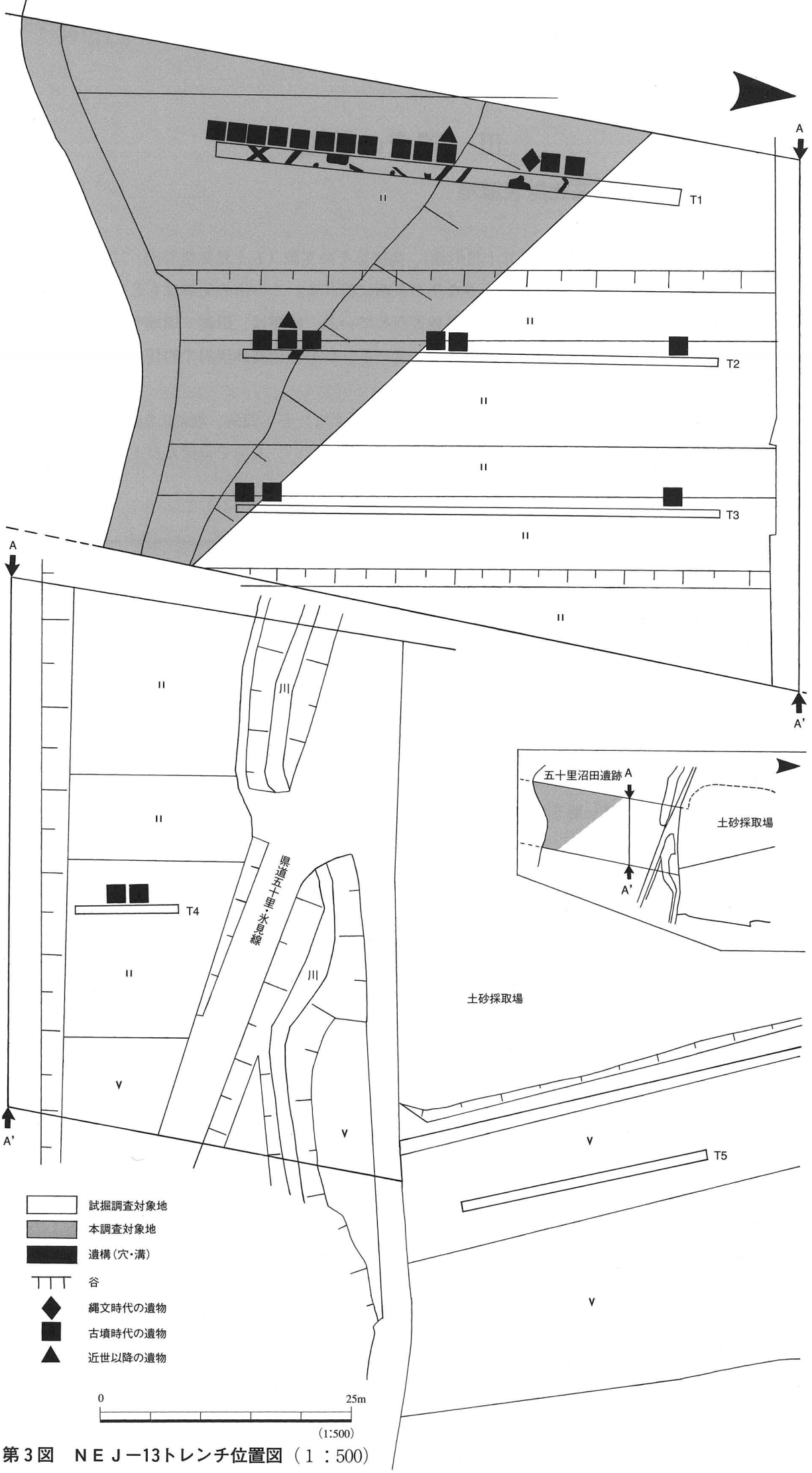
川の南側に設定したＴ１～４では、Ｔ１とＴ２の南側でⅢａ層上面で遺構を検出した。また、Ｔ１・２の北側とＴ３・４はⅢａ層を切ってⅢｂ層が堆積しており、遺構は確認されなかった。このⅢｂ層は、谷による堆積と考えられ、Ｔ１でⅢｂ層から縄文土器と土師器が一緒に出土しており、古墳時代以降の洪水によって堆積したものと考える。Ⅲｂ層の堆積は、深いところでは１m以上に達する。また、Ｔ１以外からは、Ⅲｂ層中から遺物は出土しなかった。

川の北側に設定したＴ５は、丘陵の裾部を削平して作った畑に位置し、丘陵の掘削土のみの堆積であった。そのため、遺物包含層・遺構は見られなかった。

遺構は、Ｔ１で溝10条・穴８基を検出した。溝は、ほぼ東西方向に走るものとほぼ南北に走るもののそれぞれ５条ずつで、南端のものは直交している。このことから方形の区画が予想される。穴は、大小あるが、大きいものは方形の土坑と考えられ、覆土から多くの土師器がまとまって出土している。Ｔ２では溝１条を検出した。これもほぼ東西方向に走っており、Ｔ１同様の性格が窺える。遺構の時期は溝と穴それぞれから出土している土師器から古墳時代と考える。

トレンチ番号	全長(m)	掘削深度(m)	Ⅰａ層	Ⅰｂ層	Ⅱ　層	Ⅲａ層	Ⅲｂ層	遺　　構
Ｔ１	45	0.94	越瀬		須恵・土師		土師・縄土	穴８（土師）・溝10（土師）・谷
Ｔ２	47	0.82	越瀬		土師			谷
Ｔ３	48	0.96		土師	－			谷
Ｔ４	10	0.85		土師	－	－		－
Ｔ５	25	0.57			－	－		－

第２表　ＮＥＪ－13トレンチ一覧



第３図　ＮＥＪ－13トレンチ位置図（１：500）

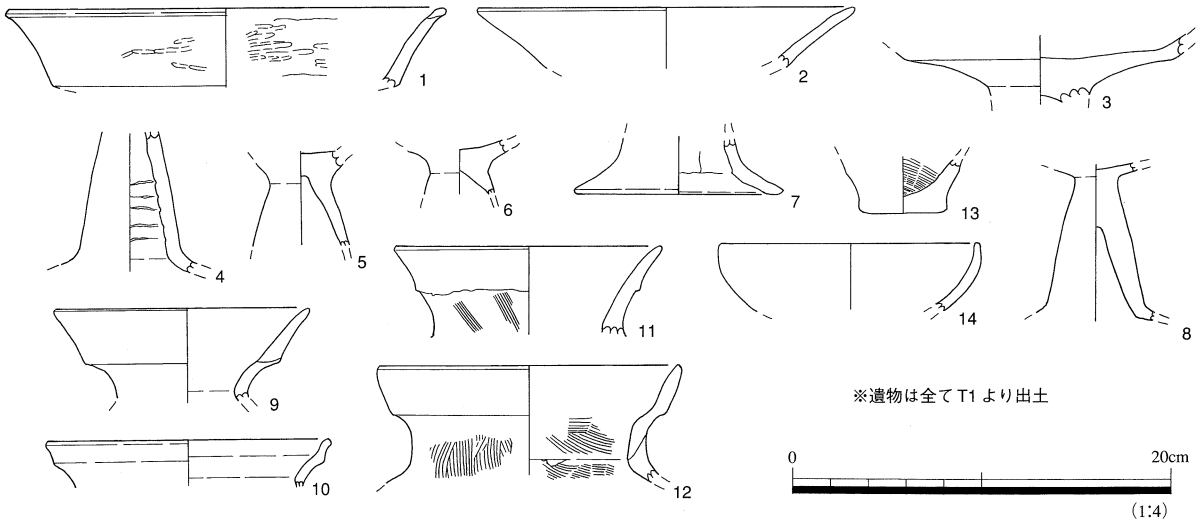
⑸　**出土遺物**（第４図・図版２）

１～８は土師器の高坏。１は坏底部で屈曲し、外反するもの。内外面ミガキ。坏部のみ。２も１と同じタイプだが、１よりも坏部がまっすぐ外に開く。土坑内より出土。３は坏底部のみ。器厚が厚く、棒状の脚部が付くと考えられる。土坑内より出土。４は「ハ」の状に開く脚部。裾部で屈曲する。内面に輪積み痕を残す。５・６は小型のもの。坏部・裾部を欠損。いずれも摩耗が激しく調整は不明。７は４と同じタイプの裾部。不鮮明だが、外面ミガキ・内面ケズリ。８も４と同じタイプの脚部。４に比べ、器壁は厚い。裾部で強く外反する。９～13は土師器の壺または甕。９は有段口縁の壺。口縁部が緩やかに外反する。口径14cm。Ⅲｂ層出土。全体的に摩耗が激しい。10も有段口縁だが、口縁部は短い。内外面ナデ調整。外面にスス付着。11・12も有段口縁の壺。調整はいずれもハケ。11は９と同様に口縁部が緩やかに外反。外面にスス付着。13は底部のみ。内面ハケ。14は土師器の鉢。底部欠損。口縁部が内湾する。調整は摩耗しているため、不明。図示した遺物はいずれもＴ１出土。遺物の時期は、小破片ばかりで難しいが概ね古墳時代前期～中期と考える。ただ、その中でも４・14などは新しく、１・３・10などは古い様相が窺えるなど、時期差があることが考えられる。この他に、小破片のため図示できなかったが、土師器甕、須恵器壺・坏、縄文土器、越中瀬戸擂鉢などが出土している。

⑹　**調査の結果**（第３図）

今回の試掘調査では、調査対象地の南西部分（Ｔ１・２）で遺跡の広がりを確認した。遺跡の範囲はⅢｂ層の堆積する埋没谷と西山丘陵の支陵に挟まれた部分と考える。今回は能越自動車道路線内が調査対象地であるが、遺跡自体はこれよりも標高が高い西方の谷奥の方向に広がりが窺える。遺跡の年代は、遺構出土遺物及び包含層出土遺物の年代から古墳時代前期～中期と考える。また、背後の西山丘陵の支陵には板屋谷内Ａ古墳群・Ｂ古墳群・Ｃ古墳群がある。この古墳群は、丘陵先端にある大型の前方後円墳（板屋谷内Ａ１号墳）を主墳に尾根上に十数基並んだ円墳や方墳からなる。これらの古墳はまだ調査が十分に進んでいないが、今回明らかになった遺跡とは、遺物の時期から考えてもそれらの造営集落の可能性が十分に考えられる。このことから数多く存在する西山丘陵の古墳群とその集落との関係を考える上で非常に重要な遺跡の一つになるであろう。

以上のことから調査対象地内の本調査を必要とする遺跡の範囲は、ＮＥＪ－13埋蔵文化財包蔵地の南西部分約1,700㎡となる。遺跡の名称は、付近の字名より五十里沼田（いかりぬまた）遺跡とした。



第４図　ＮＥＪ－13出土遺物（１：４）

2．ＮＥＪ－14埋蔵文化財包蔵地

(1) 調査対象地（図版１）

ＮＥＪ－14は、西山丘陵内にあるほぼ東西に細長い谷間に位置し、北側の山裾にに小さな川が東西に流れる。南側の山裾には農道が東西に走り、ここから北側の川に向かって下る地形となっている。現況は、南東側が畑地、他の部分は荒蕪地である。畑地は他に比べ一段高く、比高差は最大で約３ｍに達する。なお、標高は現況で約54～57ｍを測る。

(2) 調査の方法（第５図）

幅約１ｍ・長さ約10～24ｍのトレンチを６箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遺構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は3,700㎡、調査面積は90㎡である。

(3) 基本層序

Ⅰ　層	現耕作土・盛土	黒褐色シルト質ロームなど（33～118㎝）
Ⅱａ層	縄文時代遺物包含層？	黒褐色粘土質ロームなど（約26㎝）
Ⅱｂ層	縄文時代遺物包含層	黒色粘土質ロームなど（約25㎝）
Ⅲａ層	縄文時代遺物包含層	にぶい黄褐色シルトなど（約28㎝）
Ⅲｂ層	縄文時代遺構検出面？	にぶい黄褐色シルト質ロームなど
Ⅲｃ層	旧河川堆積層	黒褐色シルトなど
Ⅳ　層	地山礫	

(4) 調査の状況（第３表）

遺物包含層を検出したのは、Ｔ３・４のみである。Ｔ３では、Ⅱｂ層・Ⅲａ層の２層にわたって縄文土器片が見られた。他の遺物は見られなかったことから縄文時代の遺物包含層と考えられる。土器の時期差は見られなかった。Ｔ４では、遺物は採取できなかったが、Ｔ３同様の遺物包含層の広がりが見られた。ただし、遺構は検出できなかった。また、Ｔ３付近の畑地の耕土から縄文土器を表採している。Ｔ１・２・５・６は畑地より１～３ｍ低く、地山近くまで大きく削平を受けており、遺物包含層は見られなかった。Ｔ２では、北側を流れる小川が流路を変えて流れていたかと考えられるⅢｃ層の堆積が見られた。Ｔ５では、縄文土器を検出しているが、Ⅰ層から出土しており、混入と考える。

(5) 出土遺物（図版３）

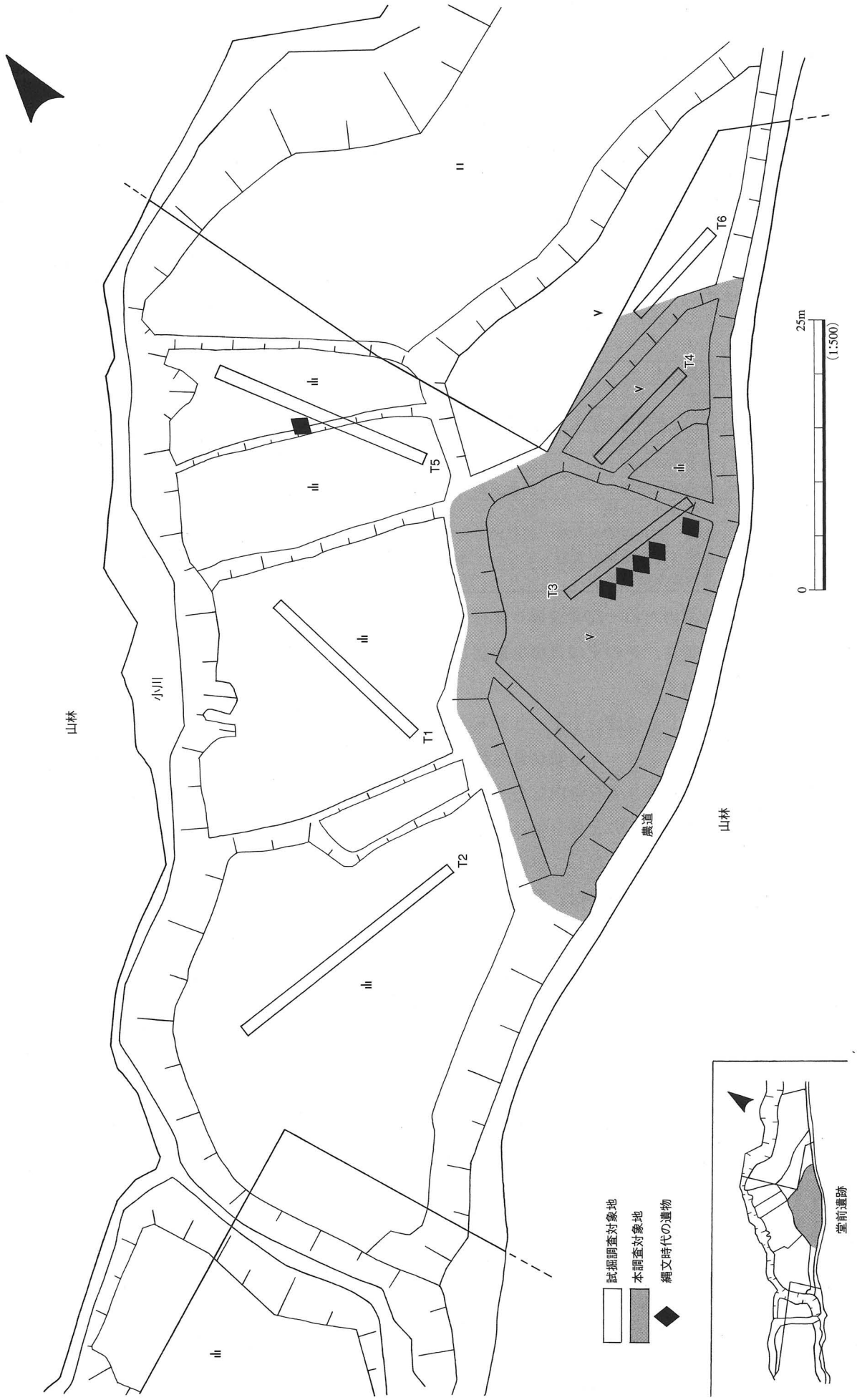
図示できなかったが、遺物は全て縄文土器。口縁部が残っているものでは、口縁端部に斜縄文を施し、その下から条が縦走する縄文を施す文様が見られる。時期は、気屋式期（後期前葉）に相当する。

(6) 調査の結果（第５図）

今回の試掘調査では、調査対象地の南東部分（Ｔ３・４）で遺跡の広がりを確認した。遺跡の範囲は他の部分が削平を受けていることから南側の山地より続く台地状の部分に限定される。しかし、近辺では、この時期の遺跡が見られない新出の遺跡であることから、この地域の縄文時代後期の様相を知る上で重要な遺跡となるであろう。以上のことから調査対象地内の本調査を必要とする遺跡の範囲は、ＮＥＪ－14埋蔵文化財包蔵地の南東部分約834㎡となる。遺跡の名称は、付近の字名より堂前遺跡とした。なお、本調査も行われており、詳細については『埋蔵文化財調査概要』を参照願いたい。

トレンチ番号	全長(m)	掘削深度(m)	Ⅰ　層	Ⅱａ層	Ⅱｂ層	Ⅲａ層	Ⅲｂ層	Ⅲｃ層	遺　構
Ｔ１	17	0.91		－	－	－		－	－
Ｔ２	24	1.5		－	－	－			－
Ｔ３	14	1.4			縄　土	縄　土		－	－
Ｔ４	11	1.22					－	－	－
Ｔ５	20	1.08		－	－	－		－	－
Ｔ６	10	0.82	縄　土	－	－	－		－	－

第３表　ＮＥＪ－14トレンチ一覧



第5図　ＮＥＪ－14トレンチ位置図（1：500）

3．ＮＥＪ－20埋蔵文化財包蔵地

(1) 調査対象地（図版４・５）

ＮＥＪ－20は、千久里山南方の丘陵の谷間の奥に位置する。谷間は、かつての茅戸池から中尾の集落へとほぼ南北にのびており、その南側が調査対象地である。現況は田地であり、旧茅戸池に近い南側が一段高くなっている。なお、標高は現況で約６～７ｍを測る。

(2) 調査の方法（第６図）

幅約1.8m･長さ約15～45mのトレンチを15箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遺構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は18,100m²、調査面積は882m²である。

(3) 基本層序

Ⅰａ層	現耕作土	オリーブ褐色シルトなど（約30cm）
Ⅰｂ層	盛土	灰色シルトなど（約22cm）
Ⅱａ層	湿地帯堆積層・盛土？	灰色粘土質ロームなど（約33cm）
Ⅱｂ層	湿地帯堆積層	黒褐色シルト質ロームなど（約26cm）
Ⅱｃ層	湿地帯堆積層	灰黄色シルトなど（約18cm）
Ⅱｄ層	湿地帯堆積層	黒色シルト質ローム（約39cm）
Ⅲ　層	中世遺物包含層	暗オリーブ灰色粘土質ロームなど（約11cm）
Ⅳａ層	古墳～古代遺物包含層	灰色粘土質ロームなど（約25cm）
Ⅳｂ層	古墳～古代遺物包含層	オリーブ黒色粘土質ロームなど（約９cm）
Ⅴ　層	遺構検出面・地山	オリーブ灰色粘土質ロームなど

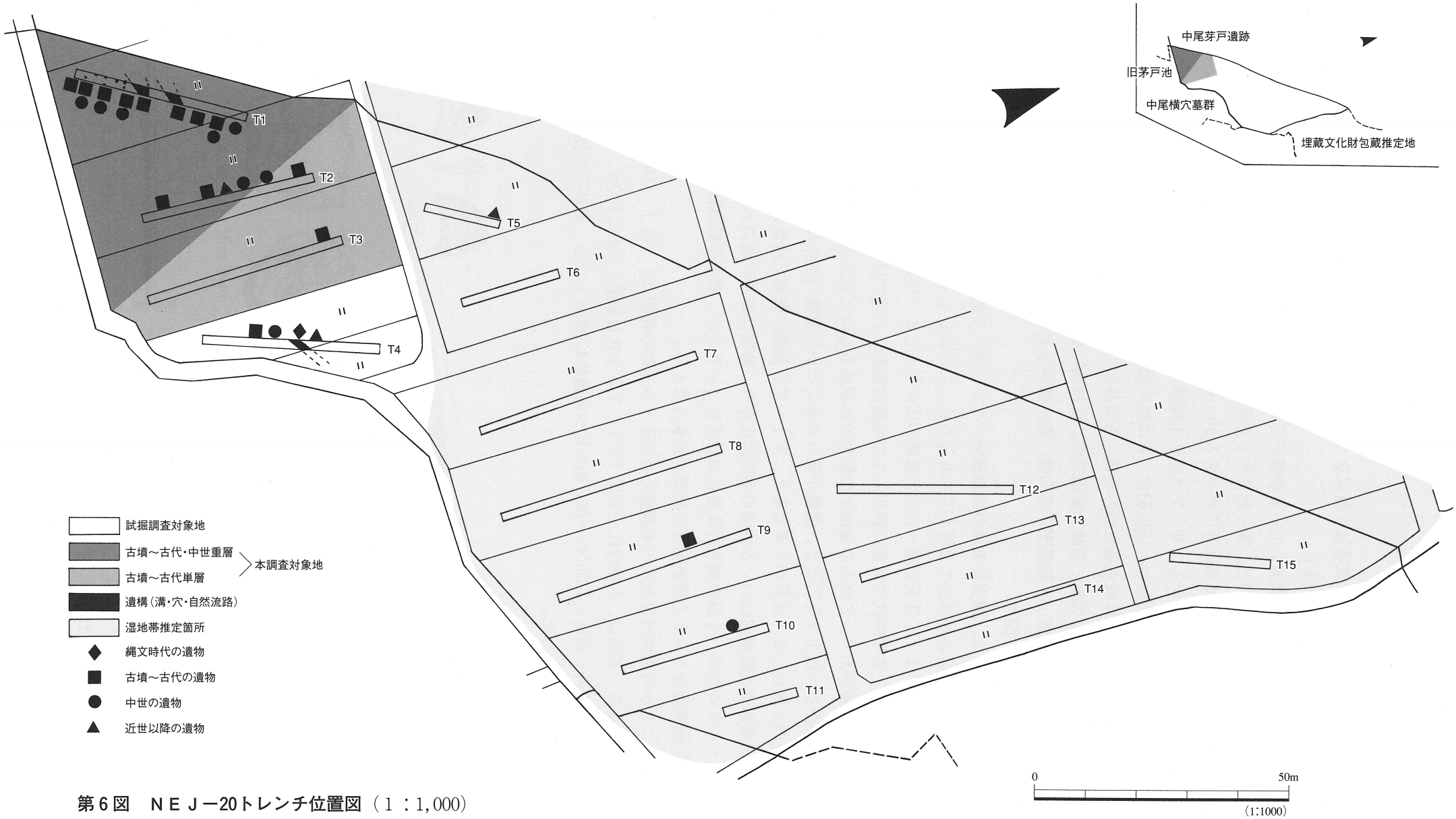
※　下層確認のため一部で深掘りを行い、現況面より３ｍ以上掘削してみたところ、Ⅴ層の下に砂層が続き、その下に貝層を確認したが、遺物は採取できなかった。

(4) 調査の状況（第４表）

遺物包含層を検出したのは、Ｔ１～３のみである。Ⅲ層が見られるのは、Ｔ１・２で中世土師器や珠洲が出土している。Ⅳａ・Ⅳｂ層が見られるのは、Ｔ１～３で須恵器や土師器が出土している。遺構は、Ｔ１で穴10基と溝２条を検出した。穴はピットが７基、それよりも大型の土坑３基である。ピットは土坑を切っているものと溝を切っているものがあり、時期差が窺える。溝は北西－南東方向に２条並行して走っている。ただし、遺構は遺物から２時期以上あるものと考えているが、Ⅴ層直上で同一面での検出となった。Ｔ４は、Ｔ１～３と同様に一段高い水田にあるが、遺物包含層は見られなかった。ただ、トレンチほぼ中央を幅70cmほどの自然流路が流れていたと考えられ、その中から石鏃が一点出土したが、混入と考える。Ｔ５～15は、Ⅰ層の下に粘土とピート層が交互に堆積する土層

トレンチ番号	全長(m)	掘削深度(m)	Ⅰａ層	Ⅰｂ層	Ⅱａ層	Ⅱｂ層	Ⅱｃ層	Ⅱｄ層	Ⅲ　層	Ⅳａ層	Ⅳｂ層	遺　構
Ｔ１	35	0.91	須恵・土師・珠洲	－	土師	－	－	－	中土・珠洲	須恵・土師・石核		穴10(中土)・溝２(土師)
Ｔ２	35	1.04		－	須恵･中土	－	－	－	須恵･越瀬		－	－
Ｔ３	40	0.92			－	－	－	－	－		－	－
Ｔ４	35	1			須恵･中土	－	－	－	－	－	－	自然流路
Ｔ５	15	1.1		越瀬		－	－		－	－	－	－
Ｔ６	20	0.91		－		－		－	－	－	－	－
Ｔ７	45	0.8				－			－	－	－	－
Ｔ８	45	0.89				－			－	－	－	－
Ｔ９	40	1.04	土師			－						－
Ｔ10	30	0.84	珠洲			－	－	－	－	－	－	－
Ｔ11	15	1.07				－			－	－	－	－
Ｔ12	35	1.01				－			－	－	－	－
Ｔ13	40	1.05							－	－	－	－
Ｔ14	40	0.91							－	－	－	－
Ｔ15	20	0.66										－

第４表　ＮＥＪ－20トレンチ一覧



第６図　ＮＥＪ－20トレンチ位置図（１：1,000）

（Ⅱｂ～Ⅱｄ層）が広がり、遺物包含層はなく、沼などの湿地帯が形成されていたと考える。

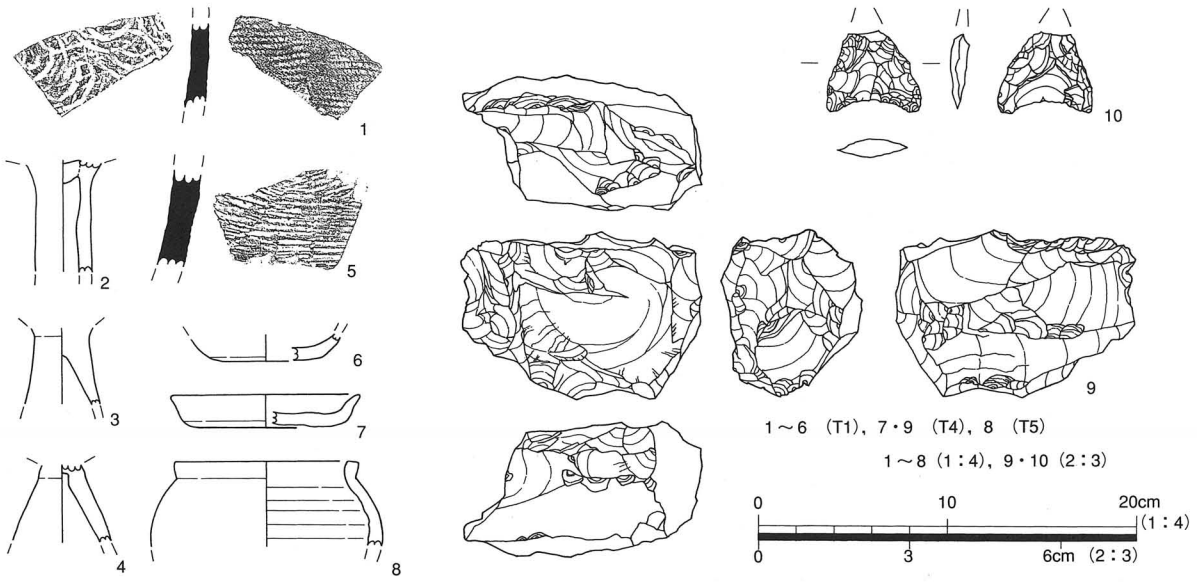
⑸　出土遺物（第７図・図版６）

１は須恵器の甕。外面は摩滅しているが格子目状文、内面に同心円状の当て具痕が残る。２～４は土師器の高坏。２は棒状の脚部。強く屈曲する裾部が付くと考える。３は小型のやや開いた脚部。４は「ハ」の字に開く脚部。時期は若干差があるがいずれも古墳時代と考える。５は珠洲の甕。外面に平行叩文、内面は摩滅している。６・７は中世土師器皿。いずれも非ロクロ成形。７は口径10cm。口縁部がやや外反する。時期は14～15世紀か。８は越中瀬戸の小型の広口壺。内外面に錆釉を施す。内面にロクロ目が残る。９は緑色凝灰岩の石核。玉製品加工時に荒割したもの。10は縄文時代の石鏃。凹基の無茎鏃で、先端を欠損。石材は安山岩か。この他に小破片や摩滅が激しいため図示できなかったが、須恵器坏・甕・壺、土師器甕、珠洲甕、越中瀬戸などが出土している。

⑹　調査の結果（第６図）

今回の試掘調査では、調査対象地の南西部分（Ｔ１～３）で遺跡の広がりを確認した。調査対象地内では、Ｔ１とＴ２の約半分でⅢ層が見られるため、この部分を中世の遺跡の広がりとし、Ⅳａ・Ⅳｂ層の見られるＴ１～Ｔ３を古墳～古代の遺跡の広がりとした。付近には同じ谷間内に、いずれも未調査ではあるが、古墳時代では東に隣接して中尾横穴墓群、古代では西側に中尾山田遺跡、中世では中尾ガメ山遺跡があり、これらの遺跡との結びつきがあるものと考える。また、遺跡全体の範囲は、Ｔ１で遺物が多く出土することと、遺構が見られることから遺跡の本体は対象地よりも南側や西側に広がるものと思われる。地形から考えると、Ｔ１～Ｔ３丘陵の裾部で台地状に高まるところであることから、東側は丘陵裾部伝いに谷内池の方向に広がり、南側は旧茅戸池のある谷奥へと広がっているであろう。そのため、今回の調査対象地には含まれていないが、能越自動車道路線内にある旧茅戸池付近の試掘調査などによる遺跡範囲の確認が必要と考える。

以上のことから調査対象地内の本調査を必要とする遺跡の範囲は、ＮＥＪ－20埋蔵文化財包蔵地の南西部分となる。面積は、古墳時代～古代（Ｔ１～Ｔ３を含む箇所）が約2,700㎡、中世（Ｔ１とＴ２の南側を含む箇所）が約1,400㎡の一部２面の延べ面積約4,100㎡となる。遺跡の名称は、付近の字名より中尾茅戸（なかおかやど）遺跡とした。



第７図　ＮＥＪ－20出土遺物（１：４）、（２：３）

3．ＮＥＪ－21埋蔵文化財包蔵地

(1) 調査対象地（図版４・５）

ＮＥＪ－21は、上庄谷平野中央部から中尾の集落東側に広がる。旧上庄村に属する。地形は南西から北東を流れる上庄川に向かって下っている。現況は広大な水田である。この付近は、古代・中世においては阿努庄の中心、近世では元和二年（1616年）に鎌仲庄八郎が開墾が行うなど、以前から肥沃な穀倉地帯として知られている。なお、標高は現況で約3.4～4.9mを測る。

(2) 調査の方法（第８・９図）

幅約1.8m･長さ約15～50mのトレンチを71箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遺構及び土層断面の検出を行った。調査対象面積は約99,710m²、調査面積は4,194m²である。

(3) 基本層序

Ⅰａ層	現耕作土	褐色シルトなど（約19cm）
Ⅰｂ層	盛土	暗灰黄褐色シルトなど（約17cm）
Ⅱａ層	中世遺物包含層	褐灰色シルトなど（約13cm）
Ⅱｂ層	中世遺物包含層	オリーブ黒色粘土質ローム（約11cm）
Ⅱｃ層	湿地帯堆積層	灰黄褐色粘土質ロームなど（約17cm）
Ⅱｄ層	湿地帯堆積層	黒褐色粘土質ロームなど（約18cm）
Ⅱｅ層	湿地帯堆積層	黒褐色ロームなど（約28cm）
Ⅲ　層	地山	灰オリーブ砂など

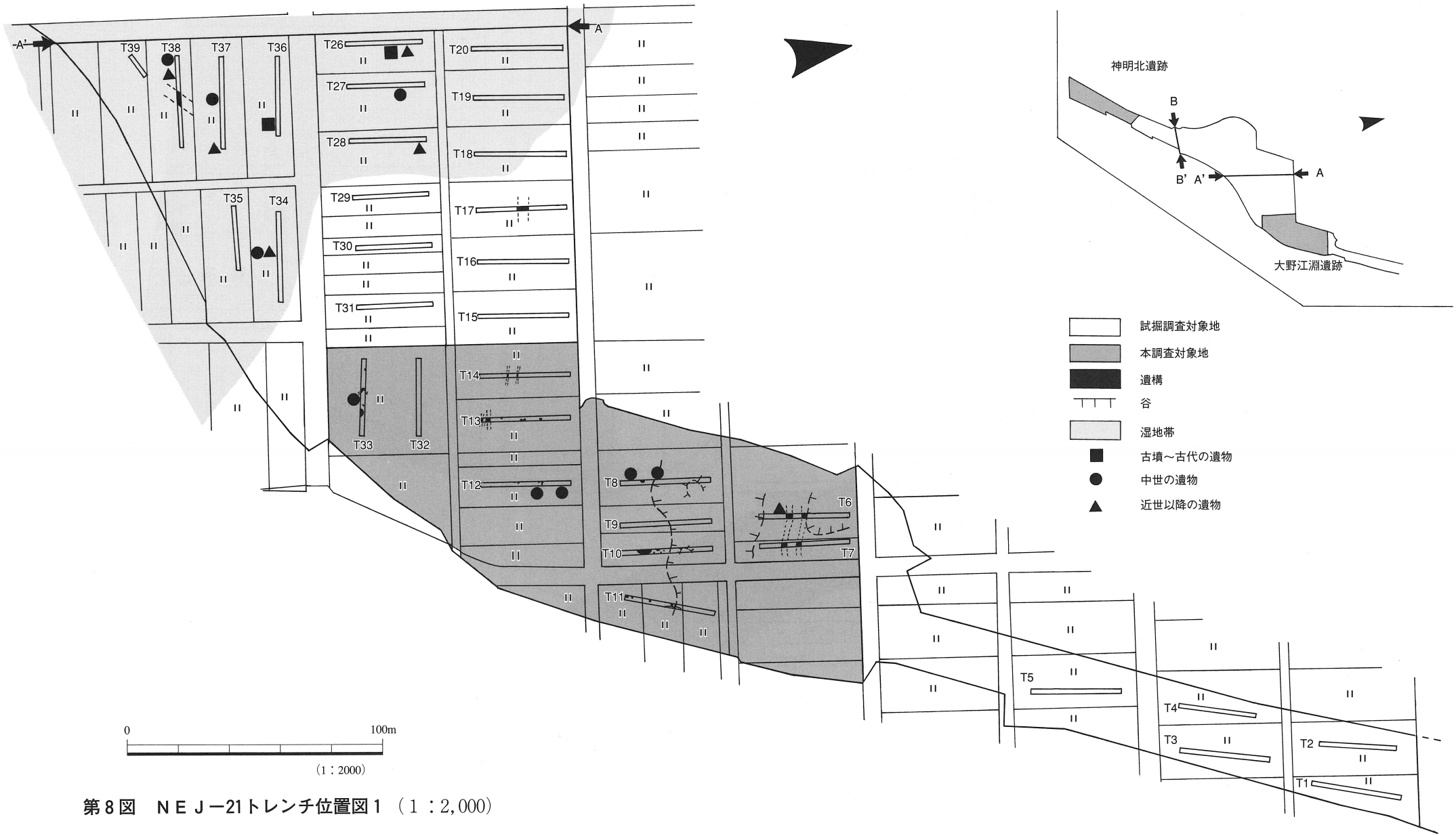
※　一部で深掘りを行い、現況面より約２～３m掘削してみたが、Ⅲ層の下に砂層が続いただけで、遺物は採取できず、下層は確認できなかった。

(4) 調査の状況（第５表）

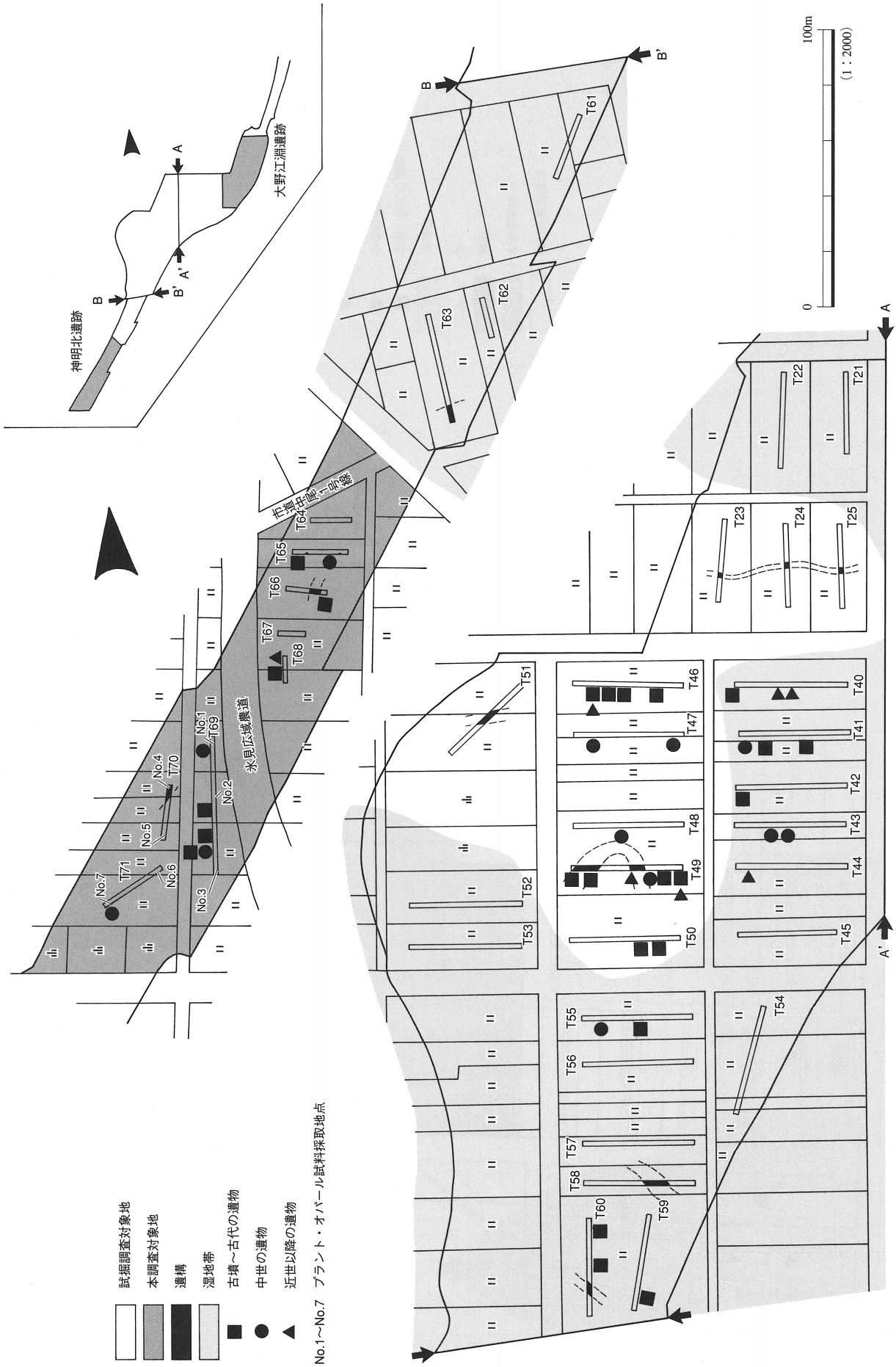
現況ではどこも圃場整備のなされた水田であるが、調査の結果、Ⅲ層の上にⅡａまたはⅡｂ層の堆積が見られる部分が台地状の高まり、Ⅱｃ～Ⅱｅ層が堆積する部分が沼などの湿地帯と考える。それは、1953年の航空写真（図版４）から白く見える部分が旧台地、黒く見えるところが旧湿地帯と水田の濃淡からも窺える。遺構及び遺物包含層を検出したのは、このうちの台地状の部分である。北側では、Ｔ１～18・Ｔ29～33で台地状の部分を確認した。Ｔ10～13で一部柱痕の残る柱穴、Ｔ８で穴、Ｔ６・７・13ではほぼ東西に走る溝、Ｔ33でほぼ南北に走る溝、Ｔ６・８～11で東西に流れる自然流路を検出した。これらは、数少ないが出土遺物から、中世前半の集落（Ｔ６～14・Ｔ32・Ｔ33）と考える。この集落は、北側を自然流路、西・南側を湿地帯に挟まれた台地上に、掘立柱建物を中心とした建物が建てられていたものと考えられる。また、この集落は同じ台地上である西側（Ｔ15～18・Ｔ29～31）にも続いていたと思われるが、大きく削平を受けていたため、遺物包含層や遺構は見られなかった。Ｔ１～５も同様に削平を受けていた。南側では、Ｔ64～68で台地状の部分を確認した。遺構はＴ65の穴の他は、湧水または水田からの漏水のため多くを確認できなかったが、遺物包含層が残っており、中世の集落が営まれていたと考える。また、Ｔ69～71では、Ⅱａ・Ⅱｂ層の堆積は見られなかったが、この集落と南側の中尾新保谷内遺跡とに挟まれた部分であることから、水田等の可能性があり、プラント・オパール試料の採取を行った。調査対象地の中央部分であるＴ23～25・Ｔ45～51では遺物包含層は残っているものの遺構は見られなかった。この他の部分は調査時に足が沈み込む程の沼田で、他に中世の集落があった当時も湿地帯と考え、遺物包含層も見られなかった。

トレンチ番号	全長(m)	掘削深度(m)	Ⅰa層	Ⅰb層	Ⅱa層	Ⅱb層	Ⅱc層	Ⅱd層	Ⅱe層	遺　構
T 1	35	0.59		—	—	—	—	—	—	—
T 2	35	0.59			—	—	—	—	—	—
T 3	35	0.51				—	—	—	—	—
T 4	30	0.45				—	—	—	—	—
T 5	35	0.49				—	—	—	—	—
T 6	35	1.11	陶器	—	—	—	—	—	—	溝2・自然流路2
T 7	35	0.97		—		—	—	—	—	溝2
T 8	35	0.66				土師	—	—	—	穴1・自然流路1(珠洲・土師)
T 9	35	0.54		盛土の除去のみ行った						
T10	35	1.2				—	—	—	—	穴5・自然流路1
T11	35	0.42				—	—	—	—	穴4・溝2・自然流路1
T12	35	0.44			土師	—	—	—	—	穴4（柱穴）
T13	35	0.56				—	—	—	—	穴4(柱穴)・溝1・新しい溝2
T14	35	0.41				—	—	—	—	新しい溝2
T15	35	0.49				—	—	—	—	
T16	35	0.46				—	—	—	—	
T17	35	0.53			—	—	—	—	—	新しい溝1
T18	35	0.49			—	—		—		
T19	35	0.56			—	—				
T20	35	0.87			—	—		—		
T21	35	0.9		—	—	—				
T22	35	0.82			—	—		—		
T23	30	0.78		土師	—		—	—	—	溝1
T24	30	0.53			—		—	—	—	新しい溝1
T25	30	0.49			—		—	—	—	新しい溝1
T26	30	0.48		須恵・越瀬	—	—	—			
T27	30	0.62			—	—	—			新しい溝1（土師出土）
T28	30	0.47			—	—	—	越瀬		植栽痕
T29	30	0.74			—		—	—	—	
T30	30	0.44			—	—	—	—		植栽痕
T31	30	0.49			—	—	—	—	—	
T32	30	0.31			—	—	—	—	—	
T33	30	0.44	土師		—		—	—	—	穴3・溝1
T34	25	0.59		土師・唐津	—	—	—			穴1
T35	35	0.62			—	—	—			
T36	30	0.61			—	—	—	須恵		
T37	35	0.71	陶器	珠洲	—	—	—			
T38	35	0.68	陶器	珠洲	—	—				新しい溝1
T39	10	0.63		—		—				
T40	40	0.49	土師・土質・陶器	—	—	—	—			
T41	40	0.53	須恵・土師		—	—	—	珠洲		
T42	40	0.59	土師	須恵	—	—				新しい溝1
T43	40	0.64	土師	—	—	—	珠洲			穴1・新しい自然流路1
T44	40	0.58	唐津	—	—	—	須恵			
T45	35	0.59		—	—	—				
T46	40	0.58		須恵・土師・越瀬	—		—	—	—	植栽痕
T47	40	0.62		青磁・珠洲	—		—	—	—	
T48	40	0.49		珠洲	—		—	—	—	
T49	40	0.64		土師・珠洲・唐津・伊万	—		—	—	—	新しい溝2
T50	40	0.76		須恵・土師	—		—	—	—	
T51	35	0.75			—	—	—		—	新しい溝1
T52	40	1.03		—	—	—	—			
T53	40	1			—	—	—	越瀬		新しい溝1
T54	40	0.84			—	—				
T55	40	0.77	珠洲		—	—	土師			
T56	40	0.86		—	—	—				
T57	40	0.71		—	—	—				
T58	40	0.7		—	—	—		—		新しい溝1
T59	35	0.68	土師	—	—	—		—		
T60	35	0.59	須恵・土師	—	—	—		—		新しい溝1
T61	25	1.4		—	—	—	—	珠洲		
T62	15	0.87			—	—	—			
T63	40	0.93		—	—	—	—			新しい自然流路1
T64	15	0.73			—		—	—	—	
T65	20	0.67	土師	珠洲	—		—	—	—	穴2
T66	15	0.98		—	—	須恵	—	—	—	新しい溝1
T67	10	0.7			—		—	—	—	
T68	10	0.78	土師・越瀬		—		—	—	—	
T69	50	0.93	須恵・土師、P	白磁・青磁・土師、P	—	—	土師、P	—		
T70	20	0.94	P	P	—	—	—	—	P	新しい自然流路（P）
T71	25	1.08	珠洲、P	—	—	—	P	P	—	

第5表　ＮＥＪ－21トレンチ一覧



第８図　ＮＥＪ－21トレンチ位置図１（１：2,000）



第9図　ＮＥＪ－21トレンチ位置図２（１：2,000）

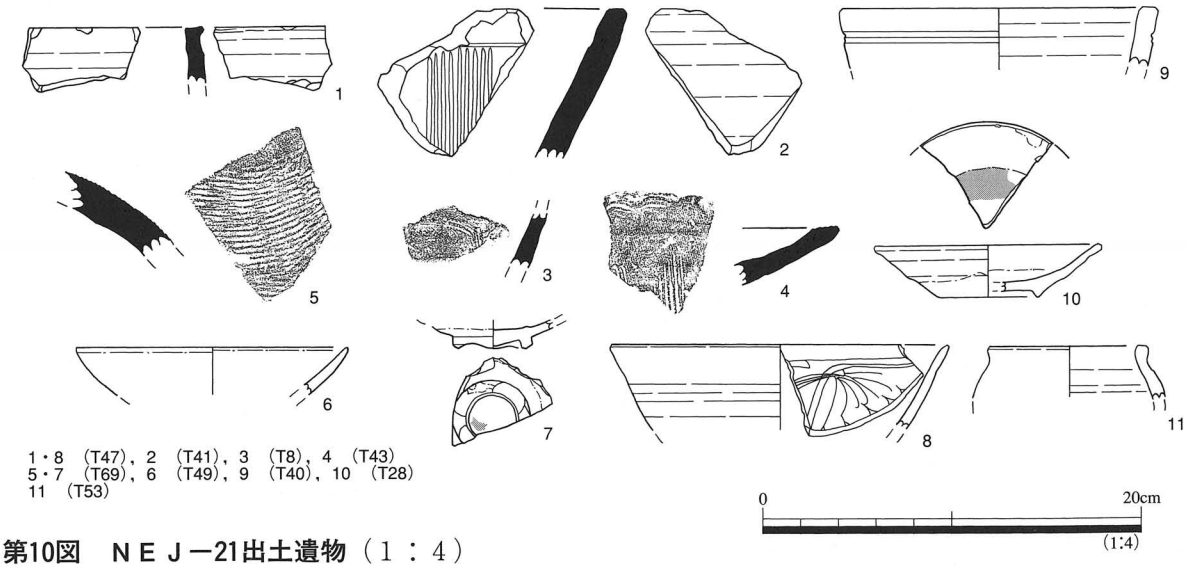
⑸ 出土遺物（第10図・図版６）

１～４は珠洲の擂鉢。いずれも小片。１は口縁部で卸し目の無いタイプ。珠洲Ⅰ期か。２は内面に９条１単位の卸し目を施す。珠洲Ⅳ期か。３は口縁部を欠損。内面に５条１単位の直曲文の卸し目を施す。珠洲Ⅱ期か。４は内面に卸し目と口縁部に櫛目波状文を施す。珠洲Ⅴ期か。５は珠洲の叩壺。肩部のみ。内面に当て具痕が残る。６・７は白磁の皿。６は小片でいわゆる口禿げ皿。７は底部のみ。内面は見込み部分に重ね焼き痕を残す。外面は高台に４箇所の弧状の抉り込みがあり、内部にスミが付着している。時期は14～15世紀か。８は青磁の碗。内面に文様が彫られているが、全体は不明。時期は12世紀か。９は土師質土器。香炉か。体部上位に強い沈線と弱い沈線の２条を施す。10・11は越中瀬戸。10は内禿皿で削り出し高台。灰釉がかかる。口縁端部及び見込みにススが付着しており、灯明皿か。11は小型の広口壺。内外面共に錆釉がかかる。この他に小破片や摩滅が激しいため図示できなかったが、須恵器坏・甕、土師器坏・甕、珠洲壺・甕・擂鉢、青磁碗、白磁皿、越中瀬戸皿、唐津皿、伊万里碗などが出土している。

⑹ 調査の結果（第８・９図）

今回の試掘調査では、調査対象地の北側（Ｔ６～14・Ｔ32・Ｔ33）と南端（Ｔ64～68）で遺跡の広がりを確認した。北側の部分は、湿地帯の中で台地状に残った部分に中世の集落が作られたと考えられ、調査対象地外では、台地状の高まりが続けば、東側にも広がる可能性がある。南側の部分は、湿地帯が終わり、東側にある中尾の集落より続く台地上に中世の集落が営まれたと考える。ただし、調査区全体の層位から中世としたが、出土した遺物には須恵器や土師器もあり、近辺に泉中尾廃寺（古代）や中尾新保谷内遺跡（古墳～中世）があることから、古代以前から集落が営まれていた可能性も考えられる。Ｔ69～71は台地上にはないが、Ⅱｃ～Ⅱｅ層でプラント・オパールが検出されたことと、南側の集落と中尾新保谷内遺跡の間に位置することから、水田の可能性があり、南側の集落の一部とした。また、湿地帯とした調査対象地の中央部は、中世以前の遺構は見られなかったが、近世の遺物がいくつか出土しており、史料に見られる元和二年の開墾時の水田があった可能性も考えられる。

以上のことから調査対象地内の本調査を必要とする遺跡の範囲は、ＮＥＪ－21埋蔵文化財包蔵地の北側と南端部分となる。遺跡の名称は、付近の字名から北側（Ｔ６～14・Ｔ32・Ｔ33を含む地域）を大野江淵遺跡、南端（Ｔ64～71）を神明北遺跡とした。調査対象面積は、いずれも中世単層で大野江淵遺跡が約16,700㎡、神明北遺跡が約7,400㎡の計約24,100㎡となる。



第10図　ＮＥＪ－21出土遺物（１：４）

4．中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡

(1) 調査対象地（図版４・５）

中尾坊田遺跡は、北を中尾の集落、南を中尾山、西を泉中尾廃寺跡、東を中尾新保谷内遺跡に挟まれた水田に広がる。中尾新保谷内遺跡は、以前から古墳時代の土師器が出土しているなどの周知の遺跡で、中尾坊田遺跡の東に隣接し、一部それを切っている形になっている。現況はほとんどが水田であるが、中尾山の裾部に一段高い畑地がある。なお、今回の調査対象地は中尾坊田遺跡の東側と中尾新保谷内遺跡の西側で、両遺跡の切り合う部分となっている。標高は現況で約4.9～5.7mを測る。

(2) 調査の方法（第11図）

幅約1.8m・長さ約15～45mのトレンチを20箇所設定し、重機により掘削を行い、人力で遺構及び土層断面の検出を行った。ただし、調査は、ＮＥＪ－21と続いて行ったため、トレンチ番号はＮＥＪ－21の続きであるＴ72からとした。調査対象面積は約21,450㎡、調査面積は1,143㎡である。

(3) 基本層序

Ⅰａ層	現耕作土	褐色シルトなど（約24cm）
Ⅰｂ層	盛土	暗灰黄褐色シルトなど（約17cm）
Ⅱ　層	中世遺物包含層	褐灰色粘土質ロームなど（約16cm）
Ⅲａ層	古墳～古代遺物包含層	黒褐色シルト（約13cm）
Ⅲｂ層	古墳～古代遺物包含層	黒色砂質ロームなど（約13cm）
Ⅳ　層	遺構検出面・地山	灰オリーブ砂など

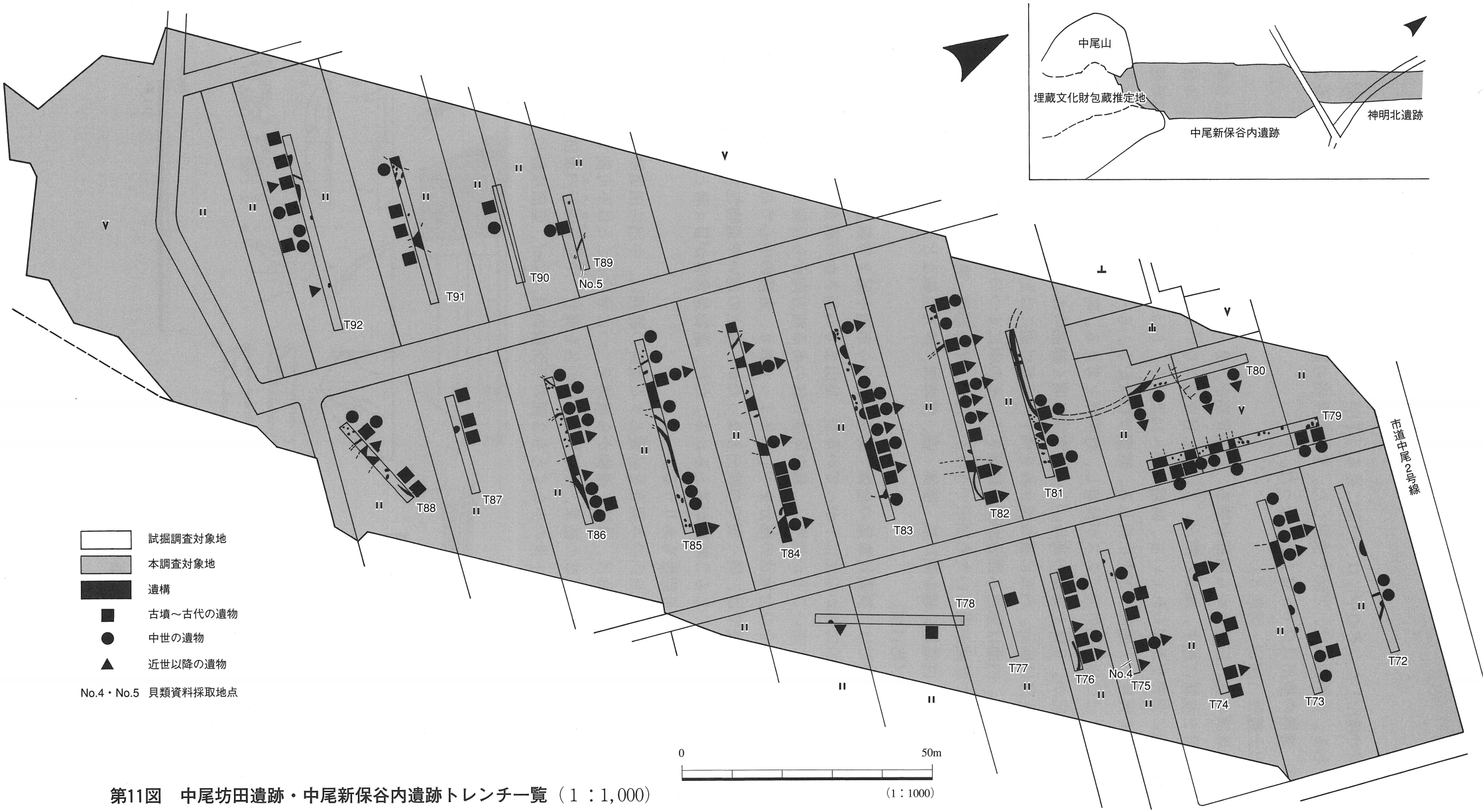
※　下層確認のため一部で深掘りを行い、現況面より３ｍ以上掘削してみたところ、Ⅳ層の下に砂層が続き、その下に遺物は採取できなかったが貝層を確認した。（Ⅳ自然科学分析　Ⅲ．貝類同定参照）

(4) 調査の状況（第６表）

調査の結果、どのトレンチでもⅡ層とⅢａまたはⅢｂ層が見られ、２時期の包含層が確認された。その中で、Ｔ79～86・89は堆積が浅く、現況の水田ではわからないが、以前は台地状になっていたことが考えられる。遺構は、概ねどのトレンチから検出した。遺構には、柱穴・穴・溝・自然流路がある。穴は、Ｔ72～75・78～89・91・92で検出した。このうち、柱痕は不明だが、小型が注穴、大型が土坑になるものと考える。埋土は、Ⅲｂ層のものが多い。溝は、Ｔ72・73・76・79～86・88・89・

トレンチ番号	全長(m)	掘削深度(m)	Ⅰａ層	Ⅰｂ層	Ⅱａ層	Ⅲａ層	Ⅲｂ層	遺　構
Ｔ72	35	0.74	白磁	珠洲				穴２・溝２
Ｔ73	40	0.69	珠洲・越瀬・唐津		須恵・土師・珠洲・中土			穴２・溝１
Ｔ74	35	0.81	須恵・陶器	須恵・土師・珠洲・中土・越瀬	須恵			穴１
Ｔ75	25	0.82		土師・青磁・陶器	須恵・土師・珠洲			穴２
Ｔ76	20	0.83		須恵・土師・珠洲・伊万	須恵・土師・珠洲			溝１
Ｔ77	15	0.93			須恵			－
Ｔ78	30	0.83			越瀬・土師			穴１
Ｔ79	35	0.58	土師	珠洲	土師・珠洲・白磁	土師	－	穴22・溝６
Ｔ80	25	0.64		－	土師・珠洲	－	－	穴４・溝１（土師・珠洲）・自然流路１（須恵・土師・珠洲・中土・越瀬・唐津）
Ｔ81	30	0.4	土師・伊万	須恵・土師・珠洲・青磁	土師・珠洲	土師・珠洲	－	穴25・溝３（土師）
Ｔ82	40	0.64			土師		－	穴４（土師）・溝６（須恵・土師・珠洲・中土・越瀬・唐津）
Ｔ83	45	0.5	越瀬・伊万	－	須恵・土師・珠洲・中土			穴11（土師・珠洲）・溝２（土師）
Ｔ84	45	0.52		－	須恵・土師・珠洲・中土	－	土師・青磁	穴２・溝７
Ｔ85	40	0.45	伊万	－	須恵・土師・珠洲・青磁	土師・珠洲	－	穴12・溝４
Ｔ86	30	0.53	伊万・唐津	－	須恵・土師・珠洲	須恵・土師・珠洲・中土	－	穴12・溝４（珠洲）・新しい溝１
Ｔ87	20	0.72		土師		土師		穴１
Ｔ88	20	0.67		土師・珠洲・越瀬	土師・珠洲	－	須恵・土師・青磁	穴７・溝３
Ｔ89	15	0.51		－		－	土師・珠洲	穴１・溝１
Ｔ90	20	0.74		－	土師・珠洲	－		－
Ｔ91	30	0.92			土師・珠洲		－	穴６・溝２
Ｔ92	40	0.86			土師・珠洲・越瀬			穴５・溝１

第６表　中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡トレンチ一覧



第11図　中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡トレンチ一覧（1：1,000）

91・92で検出した。その中には、円形に巡る（T80・81）、ほぼ南北に数条に走る（T73・82～86）などがある。自然流路は、T80で検出した。また、今回の調査では、遺物包含層は少なくとも２時期あるが、遺構の検出は全てⅣ層上面となった。

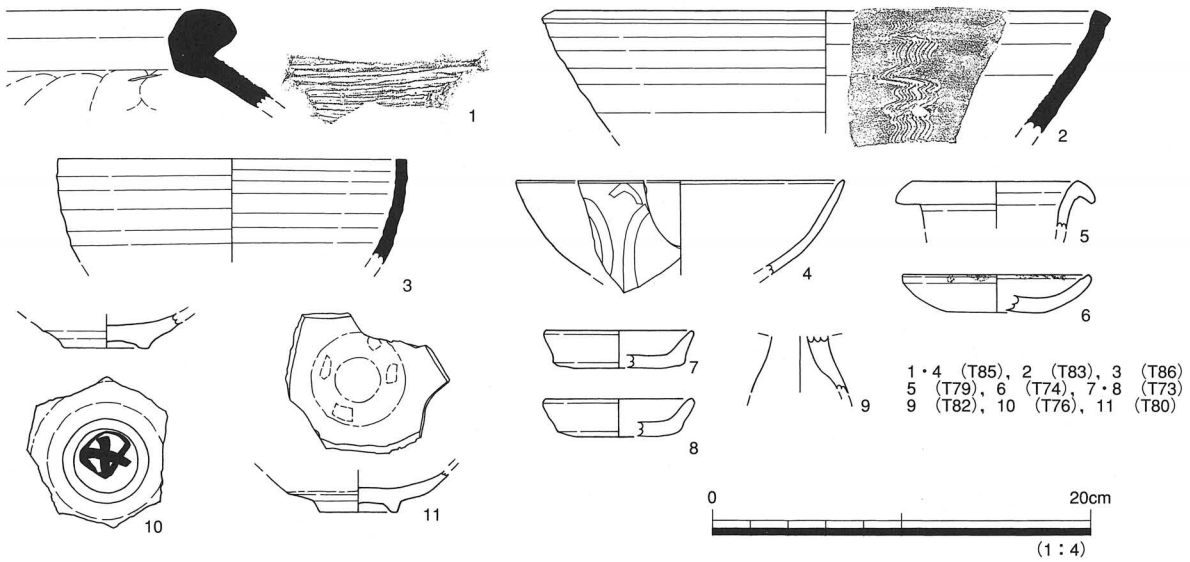
(5) 出土遺物（図12・図版８）

１は珠洲の甕。口縁部から肩部が残る。珠洲Ⅳ期か。２・３は珠洲の擂鉢。２は内面に９条１単位の卸し目を波状に施す。珠洲Ⅱ期か。３は卸し目を施さないタイプで小型。珠洲Ⅰ期か。４は青磁の碗。外面に蓮弁文が彫られている。時期は13～14世紀か。５は白磁の壺もしくは水注の口縁部。口縁部がゆるく外反し、端部が下方に折れる。時期は13世紀か。６～８は中世土師器皿でいずれも非ロクロ成形。６は口縁部内外面にススが付着し、灯明皿と考える。時期は13～14世紀か。７・８は小型。時期は13世紀か。９は土師器の高坏。「ハ」の字状に開く脚部のみ。10は越中瀬戸の皿。内外面に灰釉がかかり、体部は露胎。内面に重ね焼き痕を残す。底部外面には記号と思われる墨書がある。11は唐津内野山の皿。内面は見込み部分が蛇の目剥ぎで、その中に４つの赤色化した重ね焼き痕が残る。この他に小破片や摩滅が激しいため図示できなかったが、須恵器坏・甕、土師器高坏・甕、珠洲壺・甕・擂鉢、青磁碗、白磁皿、越中瀬戸皿・擂鉢・壺、唐津皿、伊万里碗などが出土している。

(6) 調査の結果（第11図）

今回の試掘調査では、調査対象地の全体である山裾から市道中尾２号線まで遺跡の広がりを確認した。地形は、全体的に南から北に下がっているが、地山までの高さから調査対象地中央のT79～86・89の部分が台地状に高いことが判明し、泉中尾廃寺跡のある西方向から丘陵がせり出していたとが考えられる。遺構は、その台地状の部分を中心に集まっており、集落の中心であることが窺える。遺構の時期は、今回の調査では、同一面での検出となったが、埋土の違いや遺物包含層の様相から古墳時代～古代と中世の少なくとも２時期が考えられる。ただ、遺物包含層がⅢａ層とⅢｂ層の２面あることなどから３時期以上の可能性もありうる。

以上のことから調査対象地内の本調査を必要とする遺跡の範囲は、中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡の全体となる。遺跡の名称は、遺構・遺物から遺跡を二つに分けることは不可能であることが判明し、氷見市教育委員会との協議の結果、中尾坊田遺跡の名を廃し、中尾新保谷内（なかおしんぼやち）遺跡とした。調査対象面積は、古墳時代～古代と中世の少なくとも２面の平面積約21,450㎡、延面積約42,900㎡となる。



第12図　中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡出土遺物（１：４）

Ⅳ　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．プラント・オパール分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生･古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

ここでは、ＮＥＪ－21における稲作跡の可能性を中心として当時の植生について検討を行う。

2．試料　（第９図）

調査地点は、調査区内に掘削されたＴ69の北側より№１地点、№２地点、№３地点、Ｔ70の北側より№４地点、№５地点、Ｔ71の東側より№６地点、№７地点の７地点である。

分析試料は、№１地点ではＩａ層（褐色シルト、表土）、Ｉｂ層（暗灰褐色シルト）、Ⅱｃ層（灰黄褐色粘土質ローム）、Ⅱｅ層（黒褐色ローム）、№２地点ではＩａ層、Ｉｂ層、Ⅱｃ層、Ⅱｅ層、№３地点ではＩａ層、Ｉｂ層、Ⅱｃ層、Ⅱｅ層、№４地点ではＩａ層、流路埋土（暗灰色～暗茶灰色粘質シルト）、№５地点ではＩａ層、Ｉｂ層、Ⅱｅ層、№６地点ではＩａ層、Ⅱｃ層、Ⅱｅ層、№７地点ではＩａ層、Ⅱｃ層、Ⅱｄ層（黒褐色粘土質ローム）である。

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約１ｇに直径約40μｍのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に､計数されたプラント･オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5} g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4．結果（第７・８表）

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第７・８表に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。各分類群の検出状況は次のとおりである。

１）№１地点（Ｔ69）

イネは、Ⅰａ層，Ⅰｂ層およびⅡｃ層より検出された。いずれも高い密度である。ヨシ属はⅠｂ層，Ⅱｃ層およびⅡｅ層で検出された。Ⅰｂ層の下位とⅡｃ層では非常に高い密度である。ススキ属型は、Ⅰａ層，Ⅰｂ層，Ⅱｃ層およびⅡｅ層の上位で検出された。タケ亜科では、ネザサ節型がⅠａ層，Ⅰｂ層およびⅡｃ層で、クマザサ属型がⅠａ層，Ⅰｂ層，Ⅱｃ層およびⅡｅ層の中位で検出された。クマザサ属型はⅠａ層で高い密度である。Ⅰａ層からは低密度ながらシバ属が検出された。

２）№２地点（Ｔ69）

イネは、Ⅰａ層，Ⅰｂ層およびⅡｃ層より検出された。いずれも高い密度である。ヨシ属はすべての層で検出された。ススキ属型は、Ⅰａ層とⅠｂ層で検出された。タケ亜科では、ネザサ節型、クマザサ属型ともにすべての層より検出された。Ⅰａ層からはシバ属が低密度で検出された。

３）№３地点（Ｔ69）

イネはすべての試料から検出された。Ⅰａ層，Ⅰｂ層およびⅡｃ層の上位では高い密度である。ヨシ属はⅠｂ層，Ⅱｃ層およびⅡｅ層で、ススキ属型はⅠａ層，Ⅰｂ層およびⅡｃ層で検出された。タケ亜科では、ネザサ節型がⅠａ層，Ⅰｂ層およびⅡｃ層でクマザサ属型はすべての試料から検出された。Ⅰａ層からはシバ属が低密度で検出された。

４）№４地点（Ｔ70）

イネはすべての試料から検出された。全体に高い密度である。ヨシ属は試料３のみで検出されたが低密度である。ススキ属型、タケ亜科のネザサ節型およびクマザサ属型はすべての試料から検出された。シバ属は試料２－１，試料２－２および試料２－３で検出されたが、いずれも低い密度である。

５）№５地点（Ｔ70）

イネはⅠａ層，Ⅰｂ層およびⅡｅ層の上位で検出された。Ⅰａ層とⅡｅ層の上位では高い密度である。ヨシ属はすべての試料で検出された。ススキ属型は、Ⅰａ層，Ⅰｂ層およびⅡｅ層の上位で検出されたがいずれも低い密度である。タケ亜科のネザサ節型はⅠａ層，Ⅰｂ層およびⅡｅ層の上位で、クマザサ属型はすべての試料から検出された。

６）№６地点（Ｔ71）

イネはⅠａ層とⅡｃ層で検出された。いずれも高い密度である。ヨシ属はすべての試料で検出された。Ⅱｃ層では比較的高い密度である。ススキ属型は、Ⅰａ層のみで検出されたがいずれも低い密度である。タケ亜科のネザサ節型はⅠａ層とⅡｃ層で、クマザサ属型はすべての試料から検出された。

７）№７地点（Ｔ71）

イネはⅠａ層，Ⅱｃ層およびⅡｄ層の上位で検出された。いずれも高い密度である。ヨシ属はすべての試料から検出された。ススキ属型は、Ⅰａ層，Ⅱｃ層およびⅡｄ層の上位で検出されたがいずれも低い密度である。タケ亜科のネザサ節型はⅠａ層，Ⅱｃ層およびⅡｄ層の上位で、クマザサ属型はすべての試料から検出された。Ⅰａ層からはシバ属が低密度で検出された。

5．考察

(1) 稲作の可能性について

稲作跡の探査や検証を行うにあたっては、イネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断される。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性は考えにくいことから、密度が基準値に満たなくても当該層において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。このことをもとに各層準ごとに稲作の可能性について検討を行う。

１）Ⅰａ層・Ⅰｂ層

Ⅰａ層は№１～№７の各地点で、Ⅰｂ層は№１地点、№２地点、№３地点および№５地点において分析を行った。その結果、いずれもイネのプラント・オパールが高い密度で検出された。このことは、両層準が現代年および比較的近年の水田耕作層であることと矛盾しない。

２）Ⅱｃ層

Ⅱｃ層では№１地点、№２地点、№３地点、№６地点および№７地点において分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールはすべての地点で検出された。プラント・オパール密度は4,600～7,700個/gといずれも高密度である。したがって、当該層において稲作の行われていた可能性は高いと考えられる。

３）Ⅱｄ層

Ⅱｄ層は№７地点でのみ堆積が認められた。分析の結果、イネのプラント・オパールが3,000個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、当該層においても稲作の行われていた可能性が考えられる。なお、直上のⅡｃ層がより高密度であることから、上層から後代のプラント・オパールが混入したことを完全には否定できない。

４）Ⅱｅ層

Ⅱｅ層では№１地点、№２地点、№３地点、№５地点および№６地点において分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールは№３地点と№５地点で検出された。このうち、№５地点の上位では6,500個/gの高密度でありピークとなっている。このことから、№５地点一帯では当該層が堆積する最終段階において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。なお、№３地点では1,000個/g未満と低密度であることから、上層あるいは近傍からの混入と思われる。

５）その他の層

№４地点では流路埋土について分析を行ったところ、すべての試料からイネのプラント・オパールが高い密度で検出された。このことから、流路近辺には水田が広がっており、流路を埋めた堆積物は水田土壌であった可能性が示唆される。

(2) プラント・オパール分析から推定される植生と環境

№１～№３地点のⅠｂ層、№１～№３、№６および№７地点のⅡｃ層、№７地点のⅡｄ層、№１～№５地点のⅡｅ層でヨシ属が高い密度で検出されている。おもな分類群の推定生産量（第８表）によると、これらではイネを除けばいずれもヨシ属が卓越する傾向にある。こうしたことから、各層の堆積時はこれらの地点付近はヨシの繁茂する湿地かそれに近い環境であったと推定される。また、各地点ともほぼすべての層でススキ属型やネザサ節型およびクマザサ属型が検出されている。したがって、各層とも調査地点周辺はススキ属やネザサ節およびクマザサ属などの生育するイネ科植生であったと推定される。なお、№１～№３および№７地点のⅠａ層からはシバ属が少量であるが検出されており、

これらの地点では周辺にシバ属が生育していたと推定される。

6．まとめ

ＮＥＪ－21においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性を中心とした植生ついて検討した。その結果、最近の水田層以外にも調査区のほぼ全域のⅡｃ層、№７地点近辺のⅡｄ層および№５地点近辺のⅡｅ層で稲作の行われていた可能性が認められた。

当時の遺跡周辺は、ススキ属やネザサ節およびクマザサ属などの生育するイネ科植生であり、№１～№３地点にかけてのＩｂ層、№１～№３、№６および№７地点辺りのⅡｃ層、№７地点のⅡｄ層、№１～№５地点にかけてのⅡｅ層は、湿地あるいはそれに近い環境であったと推定された。

参考文献

杉山真二（1987）「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究』第２号，ｐ．27－37.

杉山真二（1987）「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号，ｐ．70－83.

杉山真二（2000）「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社，Ｐ．189－213.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－」『考古学と自然科学』20，ｐ．81－92.

藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9，ｐ．15－29.

藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17，ｐ．73－85.